



創立 30 周年記念号
(会報第 200 号)

2025 年 9 月 14 日



目 次

創立 30 周年に当たって	荒井 正人・・・ 2
《寄稿/投稿》	
最高地点・三角点へのこだわり《5》	
大日岳 四ッ岳 寺地山	南川 金一・・・ 3
《寄稿/投稿》	
英国山岳会会員 富士・槍穂に登る	夏原 寿一・・・ 4
ようこそルームへ・・・・・・・・・・	吉田 理一・・・ 7
《予告など》・・・・・・・・・・	7

以下の《記念号特集》はホームページには掲載しておりません

《記念号特集》	
「会員からの一言」について・・・・・・・・	8
「会員からの一言」・・・・・・・・	9
「緑爽会で活躍された方々」・・・・・・・・	50

創立 30 周年に当たって

荒井正人

この度、緑爽会は創立 30 周年を迎えました。

平成から令和へと、時代の状況が著しく変化する中であって、緑爽会は「先人の肩に乗って」会の歴史を重んじ、クラブライフの精神を受け継いできた数少ない同好会と言えると思います。

今後も、活動範囲は限られるとしても、日本の登山史、あるいは日本山岳会の歴史を含め、総合的、文化的に山を探究する精神を受け継いでいく同好会として存続していきたいと考えています。

さらにまた、今後は国内に限らず、世界にも目を向け、意見を発信していくことも肝要かと思います。緑爽会会員の知見を集めて新たな視野に臨んでいきたいと思っています。

ここに、ちょうど 200 号となる会報を記念号として発行し、全員から「会員からの一言」を纏めることによって、これを 30 周年の記念誌とすることといたしました。

編集は稚拙ですが、全員から寄せられた「一言」がこのようにボリュームある冊子となりました。会員の知らなかった一面から会員同士の新たな交流が始まるかもしれません。

巻末には会に貢献された物故会員を紹介しました。こうした方々の活動が会の礎を築いてこられたのです。

また記念号と併せて、「緑爽会のあゆみ」と「会報総目次」も作成しました。

「緑爽会のあゆみ」で、いつどんな行事があったのかを見ていただき、それについて誰がどんな風に報告しているか、あるいは会報へどんな投稿があったのかを、「総目次」で見ただけであればと思います。そしてお手元にある会報を取り出して、そういえばこんなことがあったなと記憶を呼び戻していただく一助となれば幸いです。

なお、会報 1～137 号は図書室に合本があります。川口さんにお骨折りいただいて出来たものですが、橋本しをり会長も時々読まれているとのことで大変貴重な蔵書となっています。138～200 号も記念事業のひとつとして合本にする予定です。

今日の祝賀会では、どなたかに講演をしていただくことも考えましたが、お祝いの会でもあり、講演会は別途開催として、むしろ遠方からお越しの会員との、あるいは久々に顔合わせする会員との交流の場としていただくよう、歓談の時間を多く取りました。主旨をご理解いただきたく思います。

なお、今後の講演会などの予定は「予告など」に記載しました。

南川 金一

A detailed topographic map of the Yatsugatake region. The map features numerous contour lines indicating elevation. A prominent peak is labeled with the elevation '△2744.6'. The title '四ッ岳' (Yatsugatake) is written in large, bold Japanese characters across the upper center. The map includes various geographical features such as ridges, valleys, and smaller peaks, all rendered in a classic topographic style with black lines on a white background.

3

英国山岳会会員 富士・槍穂に登る

夏原 寿一

『風景画家 ターナー』（会報 No.181 別冊）を投稿して以来、英国山岳会の会報「アルパイン・ジャーナル」をときどき読んでいるが、先般、英国山岳会の会員が日本の山に登ったときの登山記を1976年版に見つけた。日本の山がイギリス人の目にどう映ったのか、それを短く紹介しよう。

筆者:H. W. R. Wade(ウェード)、1918—2004 年、イギリス人、ケンブリッジ大学法学部教授、名誉法学博士、弁護士。著書「イギリス行政法」(邦訳) が国立国会図書館に収蔵されている。



・日本へ

1974 年 10 月、学術会議出席のために日本に行くことになった私は、2 週間早く出立して山に登ることにした。日本山岳会には、私が 50 代の普通の山好きであることを伝えておいた。東京の日本山岳会の本部で、英国山岳会の会員でもある吉沢一郎さんとエベレスト遠征隊の隊長である宮下秀樹さんに会った。皆さんのお心遣いのお陰で家内共々とても快適な日々を過ごすことができた。

・富士山

今回の山旅は当然のことながら霊峰富士から始めた。この山を外国人はフジヤマと呼ぶが、日本人はフジサンと呼ぶ。東京からわずか 100km のところにあり、日本のどの山よりも 600m 以上高い。富士山の美しさは富士五湖から眺めたときの見事な円錐形の輪郭にある。登るにはまず、2400m の 5 合目と呼ばれる登山口までバスで行き、そこからは、何の変哲もない険しい山腹を 3 時間かけて登っていく。登りながら「フジヤマのガイドブックには『登頂には世界でもまれな退屈な坂道を登らねばならぬ』という一文を加えてほしい」と思った。ルートには山小屋や軽食堂が数多くあり、ゴミが散乱した跡が残っている。そんな道を歩いて苦労して登頂した人は直径 600m、深さ 180m(注 1)もある火口に満足するだろう。火山活動は 1707 年以来途絶えている。下山路も同じような道だが、ゴミは少なかった。夜は標高 2450m の簡素だが居心地の良い小屋で過ごし、床に座って箸で食事をとった。メインディッシュは山のように盛られた地元産の茸の天ぷらで、それは酒で流し込んだ。(注 1)：火口の直径は 780m、深さは約 237m (国土地理院の資料による)

・穂高-槍へ

日本アルプスには 3000m 級の山がたくさんある。最も人気のあるエリアは、東京の北西 200 kmにある北アルプスで、上高地の小さな村は日本のツェルマットあるいはグレン・ブリトルと呼ぶにふさわしい。それは、長い稜線にはスコットランドのスカイ島のような独特の雰囲気があるからだ。稜線には鎖や梯子の設置されている所があってドロミテのヴィア・フェラータのようだ。前穂高岳の北尾根、奥穂高岳の大きなジャンダルム、槍ヶ岳の優雅な尖塔など素晴らしい山々が並んでいる。前穂高岳の北尾根はグレードⅢぐらいの易しいルートで、スガー・ナン・ギリアンを彷彿とさせる。この前穂高岳の東面には、よりハードなルートがいくつもある。主峰の奥穂高岳(3190m)からは、広大な雲海越しに 140 km先の新雪の富士山がはっきり見えた。8 km南西にある活火山・焼岳から噴煙が上がっていた。

日本山岳会の持っているただひとつの小屋は上高地にあって、バスルームやカラーテレビなど、あらゆる贅沢品を備えた魅力的な小屋である。管理人は素敵なご夫妻で、コミュニケーションに難があったにもかかわらず、外国からの訪問者をもてなすためにできる限りのことをしてくれた。

ここから私は、ヒマラヤ登山の経験がある日本山岳会のメンバー数人と一緒に登ったが、特に「イタミツグヤス」さん(注2)という24歳の好青年と一緒に歩いた。彼は立派な英語を話し、私を自分の父親のように面倒みてくれた。彼は大きなザックを背負い、ザックの片側にピッケルを、反対側には傘を付けていた。傘の実用性について尋ねると、彼は「日本ではとても役に立つよ」と答えて空を見上げるようなジェスチャーをした。

上高地の背後には穂高連峰の主稜線がある。この尾根は馬蹄形をしており、その開放端は北を向いている。西側の尾根は槍ヶ岳を終点として北に長く伸びており、奥穂高岳の西南には長い尾根が延びている。私たちの最初の山行は上高地の小屋を起点としてこの長い尾根を通り、ジャンダルムやナイフリッジを越えて奥穂高岳に登り、12時間の行程をこなして暗闇の中を小屋に戻ってきた。

次なる山行は先ず馬蹄形の東端を回り涸沢小屋まで登った。ここから前穂高岳の北尾根に登り馬蹄形を時計回りに北穂高岳まで行った。この地域には多くの山小屋がある。山小屋はすべて民間の経営で、山岳会の資金を利用することはない。その快適さはヨーロッパの山小屋によく似ており、料金もリーズナブルだ。中でも、標高3106mの北穂高岳の頂上の岩の中にひっそりと佇む小さな山小屋を特筆したい。チェックインするとお茶が出された。翌日、雨で小屋に閉じこもっていると、午前中にお茶とブランデーが無料で配られた。ここで、アルパイン・ジャーナルの格調高いページの中に、この小屋のもう一つの魅力について書こう。それは音楽だ！ スピーカーが鳴り出したとき、私の心は一瞬沈んだ。しかし、聴こえてきたのは西洋の味気ないポップスではなく、バッハ、ハイドン、モーツァルトで、それも素晴らしい高音質で聞かせてくれたのだ。雲海と夕日のきれいな日だった。

翌日、北穂高岳から北へ尾根を進むと、ルートは深い谷間に落ち込む。その向こうには左右対称の槍ヶ岳(3180m)がそびえ立ち、その鋭いシルエットはどこから見ても目立つ。遠くから見るとマッターホルンのように見えるこの頂は、尾根にある小屋から10分で登れた。山頂は霧に包まれていたが、下り始めるとすぐに日差しが降り注いだ。谷に下ると、そこは鮮やかな万華鏡のような紅葉の真最中だった。道は梓川の美しい溪谷に沿って進み、山小屋やキャンプ場を通り過ぎて小屋に戻ってきた。天気の良い日にこのコースを歩いた人なら、この景色を忘れることはできないだろう。尾根から小屋までは6時間かかった。この季節は6時には真っ暗になるので、最後の1時間は懐中電灯が必要だった。その夜、日本山岳会の小屋の快適さは十分に堪能できるものだった。今回の山旅が夏の混雑が和らいだ時期であったことも幸いした。

(注2)：伊丹紹泰さん(7490)・・・日本山岳会創立120周年「グレート・ヒマラヤ・トラバース」事務局長。

神崎忠男さん(元・日本山岳会の副会長、元・日本山岳協会会長)のお世話で、伊丹さんに電話をさせていただいた。伊丹さんは「ウェードさん！ 懐かしいなあ」「ウェードさんは北穂小屋でブランデンブルク協奏曲が聴けたのを喜んでいた」「別れ際に時計をくれたんだけど、山で失くしてしまって惜しいことをした」などの思い出話をしてくださった。

吉沢さんはアルパイン・ジャーナル(1974年版)に投稿した『日本の登山』(注3)の中で、山小屋についても、特に日本人の行動についても過度に謙遜していて、多くの日本人登山者は暴徒やクライミング・アニマルと呼ぶべきであるとしている。山にはたくさんの登山者がいたが、そのほとんどは学生くらいの若者で、どこでも親切で礼儀正しかった。日本の山小屋はヨーロッパの山小屋と比べても遜色はない。食事もサービスもよく、雰囲気はいつも快適だった。山小屋の経営者たちが商業主義に毒されているようにはまったく見えない。夜はヨーロッパの平均的な山小屋

と同じくらい快適だったし、アルプスでたまに出くわすような居心地のよくない山小屋よりもはるかに良かった。日本人の行動や山小屋の雰囲気に対する吉沢さんの批判に私は同意しない。

だが、ゴミに関する吉沢さんの指摘には全面的に同意するしかない。山小屋ではパック入りの軽食が多く供されているせいもあるのだろうがゴミが多すぎる。適切な場所にゴミ捨て場を設置してルートをきれいにする努力はなされてはいる。しかし、いま必要なのは、野外活動に熱心な一般の人々への教育である。

(注 3)：ウェードさんの指摘する「…過度に謙遜している…」について、どのようなことが書かれているのか『日本の登山』を読んでみたので、その中から一例を記した。

「日本人の平均的な行動基準は非常に低くて貧しい。特に教養がないとか道徳心に乏しいハイカーの場合はそうである。彼らのせいで、そして山小屋の経営者たちの商業主義のせいで（もちろん、全ての山小屋がそうではないが）、ヨーロッパアルプスや北米、その他の文明化された地域での山旅や宿泊施設に匹敵するような快適な山旅や宿泊を期待してはいけない」

・終わりに

日本アルプスは世界的に見ればマイナーな山である。しかし、日本人の心の中では、イギリス人の心の中にあるスカイ島やグレンコー、スノードニア国立公園などと同じような存在である。そして、この地を訪れることができたヨーロッパ人は、後悔することはないだろう。私はもっと堂々とした山々を沢山見てきたが、日本アルプスのことは、世話になった人々との思い出と共に格別に忘れ難いものとして記憶に残るであろう。



キレットの向こうに槍ヶ岳
-北穂高岳にて-



遠景左端に富士山、右へ南アルプス北部の山々
-前穂高岳北尾根にて-

◆ ◆ ◆
・本稿を書くにあたり、原意を損なわない範囲内で若干の手を加えた（下記）。

-原文のタイトルは『日本訪問』だが、本稿では『英国山岳会会員 富士・槍穂に登る』とした。

-原文の標高や距離などがヤード・ポンド法で書かれている部分があるので、それらはメートル法に換算した。

-本稿には小見出しをつけた。

-文中には適宜（注）を入れた。

-写真は、筆者のウェードさんが見たであろう眺めを拙作から選んで載せた。

+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ◆ + + + + +

8人中3名が緑爽会会員！

吉田 理一

日本山岳会には金利の高い時代に終身会員の制度があった。在籍10年・20年・30年と3段階に会費の設定があり私は2000(平成12)年に終身会員にいただいた。その後バブル経済が崩壊し低金利時代になり新規入会受付は停止された。

当時百数十名在籍していた終身会員も自然減で年々減少し、本年6月開催のJAC総会資料によると僅か8名となった。内訳は秋田2人、東京3人、越後2人、関西1人である。

なんと8名中緑爽会会員が3名である。昨年のJAC総会資料では13名の在籍数だったのがこの一年間で5名も減少している。昨年の総会では酸素吸入器を装着しながらも総会後の懇親会にも出席されていた永年会員でもあるTさん、数年前湯沢町の会員の別荘宅に宿泊して苗場スキー場でスキーを楽しんだ際、マイ包丁持参で美味しい料理を振舞ってくださった方であるが今年の総会ではお会いすることが出来なかった。

数字のうえからだけ考えるとあと数年で終身会員はいなくなることになる。身辺の整理を急がねばならない時期が来ていると覚悟が出来てきた。

～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

9月25日(木) 南川会員による講演会(会報「山」8月号参照)

「創立間もない日本山岳会に彩りを添えた人びと」

※来週に迫っています。詳細は省きますが、是非貴重なお話を聞いていただきたく思います。

10月18日(土) 13時半～ 会場：ルーム104号室 アルピニズムクラブとの共催

神崎会員による講演会「最近のアジアの山岳界、国際事情について」神崎会員からアジア山岳連盟総会の映像なども交えて、その報告と意見交換を行います。

会報「山」9月号に告知を掲載します

上記2つ講演会の申込は、荒井はじめ幹事に申込みください。

荒井

横関

小林、石塚両幹事の連絡先は次項をご覧ください。

秋の山行 久しぶりに箱根に行きます。紅葉には少し早いですが、鎌倉時代の官道だった湯坂路を、小涌谷から箱根湯本へゆっくり歩きます。鷹ノ巣山からは駒ヶ岳や神山が望め、ゆるい尾根道からも周りの箱根の山々の展望が楽しめます。

実施日：10月29日(水) 雨天中止

集 合：午前10時、箱根湯元本駅

行 程：箱根登山鉄道→小涌谷駅→千条ノ滝→鷹巣山→浅間山→(湯坂路)→湯坂山→湯坂城跡→箱根湯本(歩行時間約4時間半。コースタイムは3時間)

参加申込：10月22日(水) までに石塚または小林まで、電話かメールで。

石塚

小林

次号予告<10月27日発行の主な内容>

9月18日祝賀会報告、25日講演会報告、南川さんの連載など